

研究課題名：翻訳される文化としての日本における「アリス」

研究代表者：市川 純

ルイス・キャロルの *Alice's Adventures in Wonderland* (1865)、及び *Through the Looking-Glass* (1871) は明治時代に初めて邦訳が出版されて以来、今日に至るまで多数の翻訳があり、それぞれ『不思議の国のアリス』、『鏡の国のアリス』として人気を誇っている。

『アリス』はそれまでの教訓的で子供の教育を主眼に置いた児童文学のあり方に対し、多数のナンセンス表現やパロディ、駄洒落に満ち溢れ、年少の読者を喜ばせることを主目的にしているところに英文学史上の画期的な性質を認められてきた。そこには言語学者や哲学者にも注目されるレトリックやパラドックスも満ち溢れている。しかし、アカデミックな側面からの注目とは別に、現代の日本における一般的な『アリス』の人気は原作から遊離したいわばキャラクター化した『アリス』の視覚的イメージに集中している。この現象がいかんにして成立したのかを解明するのが本研究の課題である。

この現象の萌芽はすでに明治時代の初期翻訳に見られる。特にキャロルのテキストは言語に対して様々な創意工夫を凝らした表現が多く、優れた翻訳であっても翻訳のプロセスを通して本来の性質の大部分が削ぎ落とされ、原意を伝えることさえ難しい。明治期の翻訳者自身も、言語表現の妙味よりむしろその不思議な世界観や生き物たちの魅力について触れることが多く、挿絵も重要視されている。この時点で既に一般的な読者における『アリス』の評価は、キャラクターや世界観、視覚的イメージへの偏りを見せている。

その後、ディズニーのアニメや、1970年代における沢渡朔の写真集、金子國義による『アリス』を描いた一連の絵画は、アリスに対する視覚的イメージを一定方向に形成するのに貢献し、澁澤龍彦は『アリス』に性的な要素と純潔との共存を認めるようになった。少女性と同時に、時には不気味さやグロテスクな表現も交えるようになった『アリス』の視覚的イメージは、その後現代のサブカルチャーにおける『アリス』の表象へとつながる。

現代においては、ロリタ・ファッションのモチーフにされたり、マンガ・アニメ風のイラストによって表現された『アリス』が海外のポップ・カルチャーに影響を及ぼしている。翻訳を通して原作から遊離し、バイアスのかかった日本独自の『アリス』像であるが、それが今度は英語圏にも逆輸入され、そこで影響を与える力を獲得しているのだ。